



朝焼けに



中牟田 政也

メールでの自分は饒舌だ。
「大学裏の川沿いで、蛍が見えるらしいよ。今日の夜、見に行かない？」
数通のやりとりのあと、2人で予定を立てた。

午前3時、大学前で待ち合わせ。
ここは地方大学の内でも、指折りの過疎地だろう。
コンビニの明かりだけが頼り。
およそ13分、2人で歩く。
この3分が、人間と自然の住処を分つ。

街灯のおかげで、小川を確認できる。
葦はよく繁り、虫の音が涼しい。
小川と田圃を手前に、奥には、山が2つ。
三角で高い方が男山、丸く低い方が女山。
合わせて通称、夫婦山。
昼間の記憶をもとに、風景をイメージする。

葦の隙間から、1匹、2匹。淡く明滅する。
蛍を探して、上流へと2人、歩いてゆく。
水の音、虫の音。自然の音だけが、漂っている。

空が白んで来る。蛍の時間はもう終わり。
「少しだけ、見れたね」
「うん、ほんの少しだけね。もっとみたかったな」
しかし彼女は、不満では無さそうだ。
声はやや高く、軽やかだ。

辺りがはっきりしてきた。
結構、歩いたらしい。思ったよりも山が近い。
彼女はサンダルに、白っぽい半袖。普段のイメージとは違う。
そして彼女自身は、その着ている服よりも色白で、華奢だった。
知らなかった。
「一体いつから？」
「何が？」
「よく話すようになったのって。」
「いつ？俺もわからない。」
変化の瞬間。
それに気づくものなど、いるだろうか。

朝焼けが美しい。
「こんなの、聞いたことある？」
「なに？」

近くて遠き めおと山
雲の架け橋 朝焼けに
人の想いは 渡りゆき
ぬしに届くは いつの日や

「聞いたことないよ」
「そりゃ、俺が作ったからね。」
「なにそれ。」
屈託なく笑う人だ。こんなふうにも笑うのか。
「それで、なんて意味なの？」
「大した意味は無いさ」
彼女は笑顔のままだが、さっきとは少し違う。
俺は嘘が苦手だ。

夫婦山が紅く染まる。
「そろそろ、帰ろうか」
「そうだね、こっち？」
「いや、あっちから」

もっと、彼女と話がしたい。そこに理由など、無い。
人を好きになるとは、そういうものだ。

帰りは少しだけ、遠回りしていこう。